

## カタカナ語分節表記法の実験的研究(補遺)

——読み速度課題(単語-疑似語リストを用いて)<sup>1)</sup>

井 上 道 雄

### はじめに

カタカナ語(外来語・外国語)が、日本語に急増していることはあらためて言うまでもない。今後ますます増加していくものと予想される。そして、カタカナ語を日本語にどのように受け入れていくかが、いっそう重要な課題となってくるだろう<sup>2)</sup>。現在すでに、カタカナ語の急激な増加が日本語に多くの問題をもたらしていることが指摘されている(国語審議会答申, 2000)。問題点のひとつは、和語や漢語が軽視され、長年かかって築かれてきた伝統的な日本語の機能や美しさが損なわれる点にある。日本語そのものへの影響である。いまひとつは日本語の運用面での問題であり、カタカナ語の多用が社会的コミュニケーションを阻害していることである。その原因は、カタカナ語使用の特徴にあり、目新しさを求める流行性と、限られた領域で使われる専門性にあると考えられる(井上, 1998)。流行性の強いカタカナ語では、語を受け入れる態度(認知度や理解度)において若年層が高年層より高く、世代間のギャップを生んでいる(文化庁文化庁国語課, 2000)。また、専門性、あるいは領域固有性の強い語は、使用されている領域内での意味に特定化され、他の領域から語の意味を推し量ることをむづかしくしており、領域間でのコミュニケーションを阻害している。

カタカナ語の無節操な使用には、何らかの制限・規制を設けることが必要と思われる。その対策のひとつが、国語審議会答申(2000)にある官公庁・報道機関等における外来語・外国語の取扱いについてである。カタカナ語をその熟知度(周知度や難度)によって三種類に分け、カタカナ語の使用を制限したり、使用する際に意味理解を助ける工夫を加えるといった方針を示している。それは、①定着している語はカタカナ表記する(ストレス)②定着が十分でなく日本語に言い換えたほうが分かり易い語は日本語に言い換える(イノベーションは革新などに)③定着が十分でなく言い換える語がないのは、必要に応じて注釈をつける(アイデンティティー)と表記を使い分けるものである。このような外来語・外国語の熟知性によるカタカナ表記の使い分けは、答申でも指摘されているように、その熟知度(定着度)は一時的なものであって時間経過とともに変化する。また、一般の使用においては、定着度は主観的な判断によるところが大きく(井上, 1998)、基準のあいまいさによって表記上のゆれを生むことにもなる。

井上(1998)は、このようなカタカナ語の受け入れ状況によってカタカナ語使用を制限する方向とはちがって、カタカナ語の表記面での工夫により語の意味理解を高める方法を提案した。カタカナ語を語の構成単位間で分節して表記する分節表記法である。分節を示す記号には、アンダーバー( )を用いる。例えば、ゲスト\_ハウス、テーブル\_スピーチである。それによって、語の意味単位である分節部分と一語としての語の統合性を表記のうえではっきり示すことができる。

翻訳語は、外国語の概念を日本語に取り入れたものである。例えば、「automobile car」を「自動車」と訳し、「psychology」を「心理学」と訳した。原語の意味単位の要素にその意味概念をもつ表意文字の漢字を当てたのである。それによって、意味の類推を容易にし、意味理解を助けている。カタカナ語は、音訳語である(橋本(編),1980)。語の下位の意味要素を単位として日本語に意識した翻訳語の考えと同じように、音訳であるカタカナ語をその意味単位で分節表記することによって、その表語性を高めることになると考えられる。そして、カタカナ語の分節化は、語の意味理解を促進するだろうし、語の意味の類推を容易にするだろう。

井上(1999)は、カタカナ語の分節表記法が語の読みやすさや語の認知に有効であるかを読み速度課題を用いて実験的に検討した。その結果、カタカナ語を意味構成要素の単位間で分節して表記することは、連続して表記するよりも速く読まれた(実験1)。また、読み誤りにおいても分節表記が連続表記より少ない結果を得た。したがって、カタカナ語の分節表記が、語を読むのに有効に働くことを示した。

さらに、カタカナ表記の疑似語を用いて同様の手続きで実験を行い(実験3)、分節表記が熟知性の異なる刺激語の読みに与える影響を検討した。疑似語は、カタカナ語の分節単位を他の語の分節単位と入れ替えることによって作られた。疑似語は、構成要素の単位では意味をもつが、カタカナ語とくらべると熟知性が低く、語と非単語の中間的なものと位置づけることができる。これは、カタカナ語の特徴である一時的な流行性や専門性などから一般にその熟知性は低く、疑似語はそのような日常的なカタカナ語の使用状況を反映しているものと考えられる。

疑似語の読み速度結果は、カタカナ語(実験1)と疑似語(実験3)の読み速度を比較したところ、分節表記でも連続表記でもカタカナ語が一貫して速い結果であった。このことは、読み速度課題で語単位としての熟知性が読み速度を速めることを示唆した。しかし、分節表記と連続表記間に明確な差が認められなかった。

本稿では、これらの実験を踏まえて、分節表記法におけるカタカナ語と疑似語の読み速度を直接比較するために実験を計画した。そして、語の熟知性における分節表記法の有効性を検討した。

## 目的

語のもつ熟知性は、語の認知に影響をあたえる。熟知性の高い語は、低い語にくらべてより速く認知される。そして、語の認知速度はその語の読み速度にも影響を与えるだろう。本実験の目的は、分節表記法がカタカナ表記される語の読みを促進するか否かを検討することである。カタカナ語(単語)-疑似語リストを用いて読みの速度と読み誤りを指標として読みやすさが分析される。

## 方法

**被験者** 女子短大生16名を用いた。

**実験材料** 表1は、実験で使用された刺激材料の例である。カタカナ語は、7～10拍よりなる4種類の拍数の複合語を用いた<sup>3)</sup>。各拍32語で計128語である。トライ\_アングル、クロス\_カントリー、ダイニング\_キッチン、フィールド\_アスレチック等である。カタカナ語リストには4リストが用いられ、各リストは各拍より無作為に8語を選び、計32語より構成された。カタカナ疑似語は、上記のカタカナ語を語構成要素の単位間で他の語と組み替えることによって作った。カプセル\_ストア、シナリオ\_ポイント、スクリーン\_サービス、コンビニエンス\_ホテル等である。疑似語は、一語としては明確な意味をもたないが、各分節単位では意味をもっている。組み替えは、各カタカナ語リスト内で行ない、4リストを作成した。従って、リスト内での拍数は、カタカナ語リストと同じである。カタカナ語4リスト、疑似語4リストの計8リストが作成された。一人の被験者は、各条件1リストの計4リストを受けた。ただし、同一被験者が同一の語構成要素のリストを受けることのないようにカウンター\_バランスされた。各リストは、A4判用紙に上から下へ横書きされている。語順は無作為である。練習用リストとして、各拍1語、計4語の2リストをそれぞれ分節と連続表記で用いた。

表1 カタカナ語と疑似語の実験材料(例)

	カタカナ語		疑 似 語	
	分節表記	連続表記	分節表記	連続表記
7拍	トライ_アングル	テレホンカード	カプセル_ストア	チキンエンジン
8拍	クロス_カントリー	ガソリンスタンド	シナリオ_ポイント	サウンドスチール
9拍	ダイニング_キッチン	シベリアンハスキー	スクリーン_サービス	グラフィックドリンク
10拍	フィールド_アスレチック	コンチネンタルタンゴ	コンビニエンス_ホテル	メカニカルオペニオン

**実験デザイン** 実験デザインは、表記方法と語種の二要因、2(表記：分節と連続)×2(語種：カタカナ語と疑似語)の被験者内要因計画である。

**実験手続** 実験課題は、カタカナ語と疑似語の各リストを声に出して読むことである。

できるだけ速く、読み間違いの少ないように教示した。そして、1リストの読み速度をストップ\_ウォッチで測定した。また、読み誤りの分析のために被験者の読み上げをテープ\_レコーダーに録音した。各被験者は、分節と連続表記、カタカナ語(単語)と疑似語のリストを各1リスト計4リスト受けた。同一被験者が、カタカナ語とその組み替えによる疑似語リストを共に受けることはなかった。リスト間には1分間の休憩をはさんだ。

### 結果と考察

図1は、1リストの平均読み速度を示している。読み速度は、各リストの読みの開始から終了までに要した時間である。読み誤って読みの訂正に要した時間も含まれている。表記要因の平均読み速度は、分節表記条件(46.3秒)が連続表記条件(50.0秒)より速かった。また、語種要因ではカタカナ語条件(45.1秒)が疑似語条件(51.2秒)より速かった。 $2 \times 2$ の分散分析の結果は、分節と連続表記の条件間に有意な傾向が見られた( $F(1,60) = 2.993, .10 > P > .05$ )。そして、単語と疑似語の条件間に有意な差が見られた( $F(1,60) = 7.725, P < .01$ )。交互作用には、有意差は認められなかった。

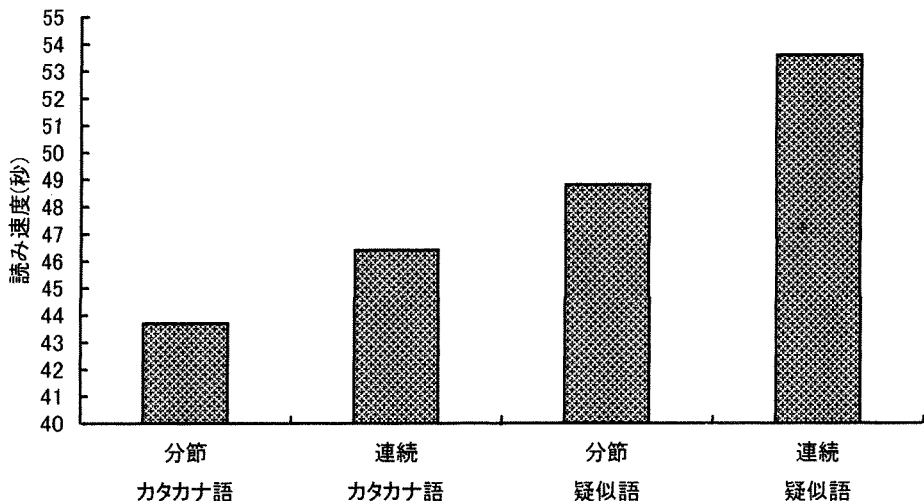


図1 カタカナ語・疑似語の読み速度

図2は、全被験者(16名)の1リスト(32語)あたりの読み誤りの平均誤数を4条件各3タイプに分けて示してある。Rは読み直し、Eは読み誤り、REは読み誤りを直したものである。各条件の1リスト平均誤数は、分節カタカナ語3.3、連続カタカナ語3.3、分節疑似語4.1、連続疑似語5.1である。

読み速度と同様に、 $2(表記) \times 2(語種)$ の分散分析をしたところいずれにも有意な差は見られなかった。

本実験の結果から、分節表記はカタカナで表記された語(カタカナ語・疑似語)の読み

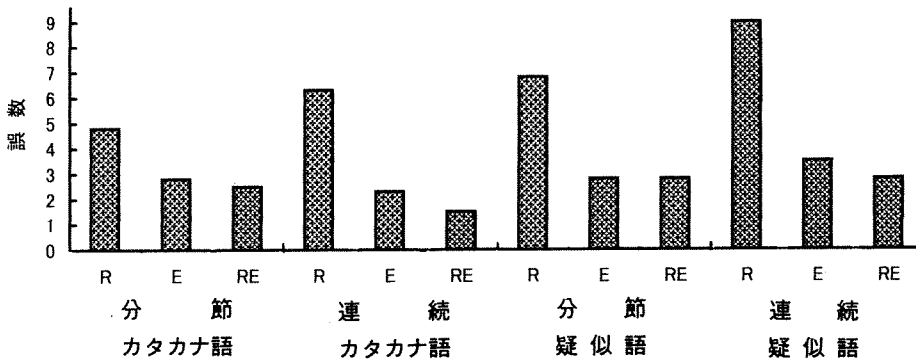


図2 カタカナ語・疑似語の誤数

速度を促進することを示唆した。また、有意味なカタカナ語は、疑似語よりも読み速度が速いことから、語単位での意味処理がなされていることを示唆している。カタカナ語を構成単位で分節する表記方法が、語の認知を促進し読みを速めたといえるだろう。また、分節表記がカタカナ語と疑似語のいずれの語においても読み速度を促進したことから、語の熟知性に関係なく語の読みを速めることを示した。そして、語を分節する記号としてアンダーバー( )が語の認知に有効であることを示した。

#### おわりに

カタカナ語をいかに日本語に受け入れていくか。日本語に今せまられている大きな課題である。本稿で示した分節表記法は、カタカナ語を表記の面から受け入れやすくするひとつの試みである。

日本語は、表意文字の漢字と表音文字の仮名(ひらがな・カタカナ)というまったく異なる文字体系を併用する世界でも珍しい言語である。そして、その特質に基づく漢字仮名交じり文は、文中での語の認知を高めその意味を理解しやすいものにしている。この日本語の特徴は、外国からの異質な文字体系の言語を受け入れやすくもしてきた。近年のカタカナ語の急激な増加は、文化・社会面からのインパクトとともにそのような日本語の言語的特質によるところが大きいと言える。

日本語は、かつて中国からの漢語を受け入れて和語と共存させてきた。やがて、仮名を発明し、多くの和製漢語を生み出した。漢語(漢字)が強力な造語力を発揮していることは、漢語が借り物の段階を経て、日本語の骨肉となったことを示すものである。近代の文明開化による西洋文明の急速な受け入れは、そのような漢語の造語力をもとにした翻訳語(社会、個人、科学等)によって可能になったとも言える。

では、今日のカタカナ語(外来語・外国語)の受け入れの成熟度はどうであろうか。井上(1998)でも述べたように、多くの和製英語(佐藤,1994)が原語の意味構成単位を組み合わせて造語されてきている(例えば、イメージ\_アップ、イメージ\_ダウン、イメー

ジ\_チェンジ等)。日本語のなかでの造語力を獲得しつつあることを示している。それは漢語の造語力と比べた場合に、受け入れの成熟度の違いによる程度の問題であるといえるのではないだろうか。

今後カタカナ語は、日本語の語彙のなかで主要な語種としてよりいっそう重要な位置を占めることになるだろう。そのためにも、語彙の側面からのみでなく本稿で示した表記の面からの検討も必要になってくるのではないだろうか。

### 引用文献

- 文化庁文化部国語課 2000 国語審議会答申「国際社会に対応する日本語の在り方」 [www.monbu.go.jp/singi/kokugo/00000041/](http://www.monbu.go.jp/singi/kokugo/00000041/)
- 文化庁文化部国語課 2000 平成11年度国語に関する世論調査(平成12年1月調査)一言葉遣い・国際化時代の日本語―大蔵省印刷局
- 橋本万太郎(編) 1980 世界の中の日本文字―その優れたシステムとはたらき 弘文堂
- 井上道雄 1998 カタカナ語表記への言語心理学からの提案：読みやすい語表記をめざして―分節表記 神戸山手女子短期大学紀要, 第41号, 45-58.
- 井上道雄 1999 カタカナ語分節表記法の実験的研究―読み速度課題を用いて 神戸山手女子短期大学環境文化研究所紀要, 第3号, 1-8.
- 佐藤 弘 1994 外国語と日本語のズレ 八潮出版社

### 註

- 1) 本研究の一部は、日本心理学会第63回大会(1999)で発表されたものである。
- 2) 徳川宗賢氏(1999年逝去)より私信にて、「カタカナ問題は、21世紀の日本語にとって大きなテーマになると思われます」(1999.04.02)とコメントをいただきました。そして、分節表記法については、「定着するかどうか、定着させるためにはどうすればいいかなど、なお考えるべき点が多い」とのご指摘を受けました。厚くお礼申し上げますとともに、ご冥福をお祈り致します。
- 3) 本研究の読み速度課題は被験者が声を出して読む時間を測定することから、刺激語の長さの単位に拍(モーラ)を用いた。拍は、一音一音の時間的な長さが心理的に等しいもの(等時拍)と意識されていることによる。